



パーティを追い出されましたが  
むしろ好都合です！ 2

---

八神凧  
Nagi Yagami



RB

レジナ文庫



# 登場人物紹介

## ゲルス

アントンを陰から操る  
怪しい男。強力な  
魔法を使うが……!?

## アントン

(ノートナ)

ルーナ達がいた  
元パーティのリーダー。  
犯罪奴隷として  
鉱山に送られた。

## ソフィア

メルティの母親。  
ノートナとメルティを  
優しく見守る。

## メルティ

ノートナに偶然助けられ、  
彼にすっかり懐いた  
女の子。

## ルーナ

補助魔法を使う冒険者。  
父親に仕送りをしているため、  
常に金欠気味。  
なぜかパーティメンバーには  
いつも振り回される。

## チェイシャ

女神の遺跡にいた  
守護獣。

## レイド

大剣の使い手である勇者。  
危なっかしいルーナが気に入り、  
陰日向から支える。

## レジナ

ルーナと共に暮らす狼。  
シルバ・シロップの  
母親。

## フレール

回復・攻撃魔法を  
担当するプリースト。  
ルーナの正式な  
パーティメンバー。

## シルバ・ シロップ

ルーナと共に暮らす  
子狼。

## 目次

パーティーを追い出されましたが  
むしろ好都合です！ 2

書き下ろし番外編

レイド、体調を崩す

パーティーを追い出されましたが

むしろ好都合です！ 2

## 第一章

「ありがとうございますー！」

「やっぱりルーナちゃんがいると活気があっていいね、また来るよ」

ランチタイム最後のお客さんが町の宿屋兼食堂の「山の宴」を出ていくのを見送る。テンプルの片づけをしているとおかみさんが話しかけてきた。

「お疲れ、ルーナちゃん。夜はサリーが来てくれるから今日はもう終わりでいいよ」

「はい、わかりました！ それじゃあ次は明日の夜でいいですか？ 明日は朝からフレーレと依頼を受ける予定なんで」

するとおかみさんはにつこり笑い、私の背中をポンと叩いてから言う。

「もちろんだよ！ あんたの本業は冒険者なんだし、気にすることはないよ。あ、でもフレーレちゃんとルーナちゃんのふたりがウエイトレスをしてくれたら、売上があがるかもしれないねえ……」

「あ、あはは……それじゃレジナ達のお散歩に行ってきますー！」

ふう……あれは本気の日だった……

そんなおかみさんから逃げて私は裏庭へ回ると、狼の親子が出迎えてくれた。

「きゅん！」

「きゅんきゅんー♪」

「がう」

「お待たせ、お散歩に行くわよ！」

デッドリーベアの事件から、一緒に暮らしている狼親子と商店街へ歩き出し、ゆっくりとアテのない散歩をする。

「なんだか久しぶりにひとりでいるかも」

—— 思えばここ最近の私は忙しすぎた。

少し前、私は勇者であるアントンとパーティを組んでいた。だけど、彼がやらかしたせいでデッドリーベアとの死闘をする羽目になったのを皮切りに、補助魔法がすごいと他パーティからちやほやされて引つ張りだになった。そうかと思えば、貴族に狙われ誘拐騒ぎに発展し、そそくさと隣町のガンマに現れたダンジョンへ赴けば、うっかりダンジョンを攻略。そこにあった女神の封印を解いてしまい、お宝である腕輪を押しつけ

られたりと、めまぐるしくいろいろなことがあった……さて、ダンジョンからアルファの町へ戻って一週間。私達は平穏な生活を取り戻していた。

一緒にダンジョンへ行ってくれた、勇者の《恩恵》を持つレイドさんは、いつも通りひとりで調査や依頼を受けている。

アントンのパーティに加入していた時から一緒に、やはりダンジョンへ同行してくれた従者のフレールは、稼いだお金を教会へ寄付して立派な聖堂を建て直すことができた。

私はというと、例の伯爵様に狙われた件があったので戦々恐々としていたんだけど、私達が町へ戻ったことがギルドに伝わった次の日、侯爵のフォルティスさんが事件の顛末を教えてくださいました。



ダンジョンから戻った次の日、ファロスさんに呼び出しを受けた私は、ダンジョンの守護獣である、チェイシヤを連れてギルドへ来ていた。

「いらっしやい……」

ドアベルが鳴っても、受付で相変わらず、新聞を読んだまま生返事をするイルズさん。その様子を見て戻ってきたって感じがするなと苦笑する。

こっちを見ず、返事だけ返してきたので、カウンターまで行って声をかける。

「イルズさん、こんにちは！何か御用があると聞きましたけど？」

「お、ルーナちゃんだったのか、ごめんよ呼びつけたりして。早速で悪いんだが、こっちへ来てくれ」

イルズさんは新聞を畳むと、ギルドマスターであるファロスさんの執務室へ私を案内してくれた。中に入るとすでにレイドさんとフレールが来客用のソファに座っており、ファロスさんとフォルティスさんがふたりの前に座っていた。私が困惑しながらフレールの隣に腰かけるとファロスさんが頷いてから口を開く。

「揃ったね。まずはダンジョンの調査、お疲れ様だった。今日はその報酬を渡そうと思っ  
て呼んだんだよ」

そう言って手渡された革袋になんと金貨が十枚入っていた。おおお……！

「こ、こんなに!? いいんですか? わたしはあまりお役に立っていませんけど……」

フレールが申し訳なさそうにファロスさんへ尋ねるが、彼は笑いながら『気にしない  
でいいから』と革袋を握らせていた。

「……抱いているその狐のことも聞いている。女神の腕輪のこともね。その話の前にフォルティスからウィル伯爵について話があるそうだ」

「はい」

私にとつてはこつちが本命だ。ファロスさんがフォルティスさんへ目を向けると、ソファから立ち上がり話をする。

『伯爵事件』の顛末はフォルティスさんの調査により、私やほかの女性冒険者を襲った伯爵様が偽者だったことが発覚。現在は本物の伯爵様が迷惑をかけた冒険者達にお詫びをしているらしい。

「正体はわからずじまいか？」

レイドさんがフォルティスさんへ尋ねると、彼は領いて肯定する。

「ああ、調査の途中で逃げられたようだな。結局目的はルーナに好意があつて、自分のものになろうとしたというところだろうか……」

「いや、それだとほかの女性冒険者が狙われた理由がわからないぞ？」

「手当たり次第襲つてルーナがよかったのかもしれない」

納得がいっていないレイドさんがさらに聞いてくれるけど、フォルティスさんの調査でもこれ以上のことはわからないようだ。

当事者の私としても気になるけど、今後犯人に狙われないならそれでいいかな？

そう思っているとファロスさんがなおも続いているレイドさんとフォルティスさんの言い合いを止めてくれた。

「この話はこれまでにしよう。またルーナちゃんに妙なことが起こつたら報告するといふことでいいな？」

「私はそれで大丈夫です」

私がそう言つて頷くと、レイドさんも惘然とした表情をしながら、

「ルーナちゃんがいいなら、俺も」

と呟き、仕方なくといった調子でソファに座り直していた。

「ならこの件は終わりだ。それじゃあ次は——」

伯爵様の件は区切りがつき、ファロスさんが話し始めたところでフォルティスさんがそれを遮った。

「ではルーナよ、今日は私とディナーに付き合ってもらえないかな？ 問題は解決したし、帰ってくるのを待っていたのだよ。どうかかな？」

あ、この人、私のこと諦めてなかったんだ!? もしかしてそれで調査したんじゃない……! 「その……今日はお世話になつている、山の宴、でアルバイトがありまして……夜は

「ちょっと……」

「な、なんと、今日もダメだと言うのか!? クッ……神は私に試練を与えているとでも……! な、ならウチのメイドをそっちへ派遣しよう! それなら……」

「ええー!? ダメですよ、それは!」

「では、どうすれば一緒に来てくれる?」

困った……悪い人じゃないんだけど、私が絡むとどうも冷静じゃなくなるご様子……なんて答えようか考えていると、レイドさんが助け船を出してくれた。

「……フォルティス様、ルーナちゃんは予定があるみたいなので、また今度にされてはいかがだろうか? 彼女も困っていますし」

あ、あれ? レイドさん、ちょっと怒ってない? 口は笑ってるんだけど、目が……!?

それを見ていたフレیرهがぼそりと何か呟いていた。

「……いろんな人に狙われルーナ……」

「え?」

「え?」

「フレیره、今何か言わなかった……?」

「い、いいえ!? 何も言っていないですよ!」

……怪しい……よからぬことを言っていたような気がするんだけど……

それともかくレイドさんとフォルティスさんが一触即発状態になり、そんな光景を前にしてファロスさんが苦笑いで呟いていた。

「……話を進めたいな……」

なんとというかすみません……私のせいじゃないと思いたい……

〈ふあーあ……騒がしい人間達じゃのう……〉

私達が騒いでいる間、チェイシヤはあくびをして自分の話になるのを待っていた。

女神の封印を守っていた『チェイシヤ』。強欲の魔神らしい。みんな協力してなんとか倒すことができたんだけど、その後小さな姿で復活して一緒に生きてしまったのだ。

チェイシヤを倒した時に現れた女神のアイテムは予期せず私に装着されてしまった。

そのことが気になって、ついてきちゃったのは仕方がないんだけど、食費がまた増えてしまうのが悩みの種である。さらに狼達と違い意思の疎通が図れるので、話し相手として私の部屋で一緒に住んでいる。



——結局、ギルドでの話し合いの核となる、『女神の封印』と『チェイシヤ』の件は、世間に出回っている話ではなく、フォルティスさん達も知らないようだった。さらにチェイシヤが何も語らなかつたので、モヤモヤしながらもその場は解散となる。

そんな中、いいこともあつた。私が伯爵様に狙われているという噂が立ち消えになり、フレレーレと共に臨時ではかのパーティに加入して冒険者家業を再開することができたのだ。

それでも『どうして何度も私が狙われたのか?』と『その目的』は謎のままなので、引き続き警戒はした方がいいとレイドさんが提案してくれ、ほかの冒険者達もそれにのつてくれた。

事態は収束し、いいことばかりだけど厄介なこともひとつ増えた。それはフォルティスさんのお誘いである。

調査を行い、私の風評を正してくれたので、流石に一度はご一緒させてもらった。だけど、その後も何かにつけてフォルティスさんが私を誘ってくるようになってしまったのだ。

あの人、イケメンだしお金持ちで紳士だけど、話していても政治的な話や、難しい話

が多くて相性が合わないって感じがするのよね。

熱心な誘いを断るのも申し訳ないけど、流されるわけにはいかないのだ。

「きゅんきゅん」

「きゅん！」

「はいはい。元気ねえ、あなた達は」

そんな私の気持ちなどどこ吹く風で鳴く子狼。じゃれあいながら歩いているシロップとシルバを見てほっこりしていると、目の前に知った顔が通りかかった。私は手を上げて声をかける。

「フレレーレ！」

商店街を歩いていたのは、私と一緒にダンジョンを攻略し、教会を建て直した功績でアコライトからプリーストに返り咲いたフレレーレだった。

買い物袋を提げているところを見ると、夕飯の支度つてところかな?

「こんにちは、ルーナ。お散歩ですか? お店はお休みでしたっけ?」

そう言いながら私と並んで歩き出す。

「今日はお昼の仕事だけだから、もう自由時間なのよ。フレレーレはお買い物?」

「はい! 教会は孤児院も兼ねていて大所帯ですから、この時間にお買い物をして仕込

まないと間に合わないんですよ」

「大変ねえ、何か手伝おうか？」

「シスターもいますし、大丈夫ですよ！ あ、こっちに行きたいんですけど、いいですか？」

珍しく寄り道をしたというフレレの視線の先には、見慣れないものがあつた。屋台かな？ それにしては派手な服を着ている人が立っているけど……

「ああ、またこれえ？」

「次はうちの番ね！」

よく見ると買い物袋を持った主婦の人達がたくさんいて、何やら一喜一憂していた。フレレがお買い物袋から何かを取り出して屋台に近づいていく。

「すみません、わたしもお願いします！」

「？ これ何？」

目の前には取っ手がついた八角形の木箱がテーブルに鎮座していた。フレレは屋台のおじさんに何かを渡し、ウキウキ顔で取っ手を掴む。

「ねえ、フレレ、これって？」

「え？ ああ、これは『ガラガラ』って言うらしいですよ。蒼希そうきの国から仕入れたとか

で、クジを引けるんです」

「へえ、これがクジなの？ 何がどうなったら当たりになるんだろう……」

私がまじまじと眺めていると、屋台のおじさんが笑いながら答えてくれた。

「この箱を回すと穴から色のついた玉が出てくるんだ。で、玉の色によつて決まっている景品が貰えるって寸法よ！ 今、商店街で銅貨五枚以上の買い物するとチケットが一枚貰えるんだが、それ一枚で一回できる。理由はよくわからないけど、ウィル伯爵が『町の人達にも迷惑をかけたから、何かしようと思った』とかで、景品と一緒に商店街へ引き渡されたんだよ」

「へえ、あの伯爵様太っ腹ねー。ちなみにどんな景品があるのかしら？」

「きゅん！」

「がう！」

私が景品を見ようと思った矢先、シルバとレジナが目を輝かせて尻尾を振り、歓喜の声で鳴いた。シルバとレジナの視線の先には――

【三等 ワイルドバッファローの霜降り肉】

「わかりやすいわねー」

食いしん坊なシルバはともかく、お母さんのレジナもお肉に目がいくとは……そんな

二匹を見て微笑みながら、フレールは取っ手を持ってガラガラとやらを回し始めた。

ガラガラガラ……

「きゅん！ きゅーん！」

「どうしたの、シロップ？ 抱っこ？」

ガラガラの音がした途端、シロップが急に抱っこをせがんできたので抱えてあげると、シロップはキラキラした目でガラガラを見ていた。

「はあ！」

珍しくフレールが気合を入れた声を出し、一気に取っ手を振り抜いた！

「きゅんきゅん！」

そしてシロップは大興奮。このガラガラの何がシロップをそうさせるのだろうか？

カラン……

出てきた色は――

「あー残念！ 白だね、はい、ティッシュ」

残念賞、というやつらしい。シンプルな箱のティッシュを受け取りながら、フレールはもう一枚チケットを渡す。

「この一枚でどうにか……！」

「気合入っているわね、フレール。何が欲しいの？」

「あれです！」

フレールが指した先には、豪華な調理器具セットが並んでいた。

「フライパンにお鍋と包丁のセット？ いいね、これ！」

「でしょう？ 教会のフライパンがそろそろ限界で、ここはぜひ当てたいと思っているんです」

そう語るフレールの目は真剣そのもの……ぜひ獲得してほしい……

「きゅんきゅん！」

「なあに？ シロップもやりたいの？」

「きゅ、きゅーん！」

私の手をかぶかぶして尻尾を振るシロップ。

「ごめんね、私はチケットを持っていないからできないわ」

「きゅきゅん!？」

「あ！ どこ行くの！」

シロップが私の手から離れてどこかへ走り去る。追いかけようか迷ったけど、シロップはレジナ達と勝手に町へ散歩へ行くこともあるし、飼い主が私だと知っている人が多

いから、追いかけてなくても大丈夫かな？

とりあえず今はフレールを見守ることに決めると、ちようど玉が出てくる瞬間だった。

「えいっ！」

ガラガラガラ……カラン……

「白！ ティツシユ箱ね！」

「あー、残念……。でも楽しかったです！」

「まだ景品はあるから、いつでも挑戦してくれ！」

「チケットを手に入れたらまた来ますね！」

フレールがおじさんにそう言っつてその場を離れようとした時、

「きゅきゅーん♪」

シロップが帰つてきて、私の足をべしべしと叩いていた。

口になか唾つばえているわね？ 屈んで唾つばえているものを受け取ると――

「あ、これチケット！ どこかで拾つてきたの？」

「きゅんきゅん」

コクコクと頷く。

「拾つたものはダメよ、きちんとお買い物をしなさい」と

「きゅーん……」

私が抱っこして言い聞かせると、がっかりした様子で耳と尻尾が下がった。

しかし、おじさんがそんな様子を見て声をかけてくれる。

「なんだい、ガラガラをやりたい狼だなんて変わっているなあ。なら、ウチの肉を買っ

てくれよ、それで一回つてことで」

ぬぬ……商売上手なおじさんだ……よく見れば肉屋さんが近くにあり、シルバとレジナが揃つてそつちを見ていた。さらに言ううと隣のおじさんは向かいの魚屋さんだ。商店街の人が持ち回りでこのガラガラをしているみたいね。

「……じゃあ、後でお肉を買いに行きますね。はい、シロップ」

拾つたチケットをおじさんに渡し、私は抱っこしたままシロップをガラガラの取っ手

の前に差し出す。

「きゅきゅーん」

興奮してなんとも言えない声を出しながらパクツと取っ手を唾つばえる。

「きゅん！」

「がうがう！」

その様子を見て、尻尾をぶんぶん振りながらチラリと霜降り肉に目を移すシルバとレ

ジナ。

そして今、シロップの首がぐるぐるんと回り始めた！

ガラガラ……

そして――

カラン……

出てきた色は！

「お、おとお!? 金……金色だ!!」

ガランガランガラン!

「うわ、びっくりした!」

おじさんが興奮して手元のベルをめちやくちや鳴らし、私はびっくりして耳を塞ぐと、フレールが肩を叩きながらぴよんぴよん跳ねていた。

「すごい! すごいですよ、シロップ! 金色は一等です!」

「きゅきゅん♪」

フレールがシロップの顔をぐりぐりすると、満足そうに目を細めて鳴いた。

「一等!? え、本当に!」

「あ、ああ、間違いないぜ!」



金色の玉を私に見せて冷や汗をかくおじさん。となると気になるのはもちろん景品だ。「で、一等ってなんですか！ お肉よりいいものですよ、きつとー！」

「おう、もう引き当てられたのは悔しいけど、当たりは当たりだ。一等の景品はこれだ！」バン！ と、後ろにあるパネルを叩きながら叫ぶおじさん。

そこにはきれいな海と島の絵が描かれていた。

「えっと……その絵、ですか？ 確かにきれいですけど、食べ物とかの方が……」

「なんだ、飼い主も食い意地が張ってんな……。違う違う、景品は『南の島 三泊四日の旅』だ！」

おじさんの興奮っぷりに呼応するように、フレレレが口到手を当てて驚く。

「え!? 南の島ってもしかして、奇跡の島といわれている『ヘブンリーアイランド』ですか?」

「そう、何百年前から変わらない地形や生態系を持つあの島だ。最近アクアステップの国がリゾート開発を進めてバカンスにいいって評判なんだ」

「ですよ、ね！ デイジーがそのうち行こうって言っていたのを覚えています」

全然知らない……しかしフレレレがこうも食いつくとは、恐るべしリゾート地。

私が呆気にとられていると、おじさんが封筒を差し出してきた。

「はい。これが景品だよ。ふたりまで行けるから、彼氏か友達でも誘ってゆっくりしなよ！」

「あ、はい！ 行くわよ、みんな」

封筒を受け取り、次の人が待っているのでその場を離れようと狼達に声をかける  
と――

「きゅーん……」

「がう……」

シルバとレジナが霜降り肉を見ながら切ない声を上げていた。

「ほら、どかないとダメよ。お肉屋さんのお肉でいいでしょ?」

「きゅん！」

お肉、と聞いてシルバがお座りからシャキッと立ち上がり、私の足元にびったりくっついた。

「うふふ、結局お肉が食べられればなんでもいいんですね」

フレレレが笑いながらシルバを撫で、レジナも後ろ髪をひかれながら渋々後を追ってきた。

少し離れたところで封筒を開けてみると、中にはチケットが二枚入っていた。一枚取

り出して概要を見てみる。

「すごい、船代と宿代がタダだって！ あ、ご飯も三食全部出るみたい。至れり尽くせりね！」

「いいですね！」

「ふたりなら私とフレレレで行けばいいかな？ ダンジョン攻略をしたパーティとして、レイドさんも行けたらよかったんだけど」

「え？ わたしが行つていいんですか!？」

「そりゃあ、現状では正式にパーティを組んでいるのはフレレレだけなわけだし、いいに決まつてるじゃない」

「うう……一生ルーナについていきます……」

「大げさすぎない!？」

泣いて喜ぶフレレレをとりあえず放置し、注意事項を確認するとペットも問題ないみたい。レジナ達も一緒に行けそうだ。

「持っていくものは着替えとかだけでよさそうね。フレレレはいつが都合いいか、確認しておいて」

「わかりました！ もう今からでもいいですけど！」

「流石さすがにそれはちよつと……明日は依頼があるでしょ?」

私が苦笑しながらそう言うと、フレレレは、

「明後日から行きましょう！」

と、張り切つて去つていった。

その足でお肉屋さんへ寄つた後、バカンスに行くため、不在になることを告げにレイドさんを探してギルドへと赴く。

カラン……

ギルドの扉を開けると、ドアに設置されたベルが軽く鳴る。

「リゾートかあ、服はどうしようかな?」

「お、いらつしゃい、ルーナちゃん。なんか楽しそうだね?」

誰ともなく呟いた私の言葉をイルズさんが聞きつけ尋ねてくる。

「えつとですね、商店街でやってる『ガラガラ』って知ってますか?」

「ああ、俺達も設営を手伝つたからな。あれがどうかしたのかい?」

「実は私……というかシロップが回したんですけど、一等が当たつちゃって」

私が困惑気味に言うのと、イルズさんがぎよつと目を見開き、声を小さくしてから私に言う。

「本当か？ もしそうなら相当運がいい。始まって二週間程度だけど、まだ白玉が多いはずだ」

「そうなんですか？ シロップは一回で出しましたけど……」

「きゅんきゅん？」

何？と言わんばかりに首を傾げて尻尾を振るシロップ。

「無欲の勝利か……？ それで楽しそうだったのか。確かペアチケットだっけ？ フレーちゃんに行くのかい？」

「ええ、ダンジョンの件もあるからレイドさんとも行きたかったんですけど、あいにくチケットが二枚しかないで謝っておこうかと」

「律儀だなあ。レイドはちょうど徹夜で単独の生体調査の依頼に出たところだ。帰るのは明日の朝だから、あいつが帰ったら俺から言っておくよ」

「あ、本当ですか？ なら明後日から三泊四日、ヘブンリーアイランドへ行くって伝えておいてください！ 明日は私達も依頼で近隣の森へ出てると思っていますし」

「わかったよ、いいなあ、リゾート地……俺も休みたいぜ」

「あはは……じゃ、お願いしますね！ また明日！」

本気で咳くイルズさんに挨拶をしてギルドを出ると、バイト先の山の宴へ歩き始

める。

おかみさんにリゾート行きを伝えないとね！

だけど、このリゾート地で私達はとんでもない目にあうことになる。そんなこと、この時はまだ思いもしなかった。



「さて、午後はなんとか休みが取れた。ルーナをデイナーにご招待といこうか」

「大丈夫ですかフォルティス様。なんだか偽伯爵みたいになっている気がしますけど……」

「何を言う、私は紳士だぞ？ 襲うような真似は断じてしない！ そう、少しずつ心を通わせてだな——」

「(そこじゃないんですけどねえ……)」

主人の行動は少し度が過ぎていると思ひ、執事のバリヤツソがやんわりと注意をするが、フォルティスはどこ吹く風で持論を展開する。そうこうしているうちにフォルティス達が乗る馬車がルーナの下宿先である山の宴のに到着した。



「すまない、ルーナはいるだろうか？」

「はい、いらっしやい……って侯爵様でしたか。えっと、ルーナはいませんか？」

「むう、すれ違いか……帰ってくるまで待たせてもらってもいいだろうか？」

「構いませんけど、帰ってくるのはしばらく先ですよ？ 商店街のクジで一等が当たって、今朝から……なんだっけ、あんた」

「……『ヘブンリーアイランド』だ」

「山の宴」のマスターがボソリと呟き、フォルティスは驚いておかみさん達へと尋ねる。「ヘブンリーアイランドだって!? いつか私がルーナを誘って行こうと思っていた場所じゃないか！ 商店街のクジ……あ、あれは確かペアチケットのはず……だ、だ、誰と行った？ もしかしてレイドか!？」

「フレイレと行くって言ってたっけね。後は狼達と狐も連れていきましたよ。ルーナは『レイドさんが行けなくて残念』だとぼやいていましたけど」

おかみさんは意地悪くレイドの名前を出したが、フォルティスは『フレイレと行く』という部分を聞いて安堵する。しかし、すぐに別の不安が脳裏によぎった。

「リゾート地……アバンチュール……見知らぬ男女の淡い恋……」

「フォルティス様、口に出ていますよ……というか発想が古いですね……」

パリヤツソが呆れながら呟くと、フォルティスがぐわつと顔を上げて叫んだ。

「情報提供感謝する！ 行くぞ、パリヤツソ！」

「ああ、お待ちください！ すみません、失礼いたします！」

バタバタと出ていくフォルティスを追ってパリヤツソが馬車へ乗り込むと、今度はギルドへ向かえと御者に指示を出していた。

「ど、どうするおつもりですか!？」

「知れたこと……私も行くのだ……!？」

ギルドに到着すると、フォルティスは転がるように馬車から降りた。その勢いのまま、ギルドの扉を開けて中へ入る。そして目当ての人物を見つけて声をかけた。

「見つけたぞ、レイド!？」

「あれ？ フォルティスじゃないか。ルーナちゃんならいないぞ?？」

「知っている！ リゾート地だろうか？ ……なあレイド、お前も行ってみたいと思わないか?？」

「?」リゾート地にか? というか、どこでルーナちゃんが行ったことを知ったんだ? まあ、ダンジョン疲れもあるし、少しゆっくりしたいとは思うけど」

レイドがそう言うのと、フォルティスはニヤリと笑い、肩を組んで耳元で囁く。

「行こうじゃないか」

「は？」

「行こう、私達もリゾート地に！」

「い、いや、俺は金がないし……」

「構わん！ 私には貯金がある。お前ひとりくらい余裕だ。明日の早朝出発だ、準備を怠るなよ！」

それだけ言うと、ギルドを出ようと歩き出す。

「俺はまだ行くとは——」

レイドが引き留めようとするが、パリヤツソが前に立ち口を開く。

「申し訳ない、レイド殿、ここはひとつフォルティス様についていってはいけませんか？」

レイドに懇願するパリヤツソを見て一息つき、レイドは腕組みをして尋ねた。

「ルーナちゃんが好きなのはわかるけど、それならひとりで行けばいいんじゃないか？ どうして俺なんだ」

「……恐らくですが、ルーナさんの顔見知りであるレイド殿がいれば、邪険にはされな  
いだろうという打算と、フレレーさんの相手をレイド殿にさせようという魂胆かと……」

「マジか……」

いつもならこんな無茶は言わないが、ルーナが関わっているとダメになるな、と思  
いながら、パリヤツソへ返答する。

「わかった。あの調子なら断つても宿の前で待っていきそうだし、行くことにするよ。そ  
れにバカンスに年頃の娘がふたりというのも心配だしな」

「お、やっぱり心配なんだな？」

にやにやと笑いながら言うイルズ。その彼を睨みながらレイドは口を開く。

「ゴホン！ 茶化さないでくれ、イルズ。そういうことになったから、すまないけど依  
頼は中止だ」

「おう、侯爵様の頼みとあっちゃや仕方ねえ、ほかのパーティに頼む。そういや、向こう  
にもギルドがあるらしいぞ。面白い依頼があつたら受けてみたらどうだ」

「気が向いたらな」

イルズの依頼をキャンセルし、雑談をしているとパリヤツソがレイドへ話しかける。

「それでは明日、お迎えに上がります」

「ああ、よろしく頼むよ」

パリヤツソを見送り、その後すぐにレイドも準備のためギルドを出た。しばらく歩い  
てから一度立ち止まり、逡巡する。

「(リゾート地か……海は危険だし、いろいろ準備をしないとイケないかな。フォルティスはある調子だから期待できないし)」

胸中でそう思いながらレイドの足は商店街へと向いた。



ピイイイイ!

「うわ!? な、なんじゃ!？」

けたたましい警笛の音で目を覚ましたのは、私の腕ですつと眠っていたチエイシャ。

「船か……わらわは初めて見たのう。ふあ……」

チエイシャは私の手から飛び出して甲板に着地しながらあくびをする。先ほどの笛は船が離れるという合図だったみたい。

「チエイシャちゃんはいつからあのダンジョンにいたんですか? 船を見たことがないということはかなり昔?」

いつもの白いローブから装いを変え、水色のワンピースを着たフレレが屈んで尋ねると、チエイシャはフレレの胸に飛び込んで疑問に答える。

「そういうわけではないのじゃ。わらわの国では必要なかったからのう」

「国……?」

「まあ気にするでない。それにしてもいい天気じゃのう」

「そうね、晴れてよかったわ」

アルファの町の近くには海に続く湖があり、そこからリゾート地であるヘブンリーアイルランドまで向かう。ここから丸一日かかるので、船で一泊する形だ。

「うーん! いい気持ち! あら?」

大きく伸びをしていると、視線の先に狼達がお座りしているのが見えた。

「きゅん……」

「がう」

「レジナ達は何してるのかしら?」

「落ちたら助からないと言いつ聞かせておるようじゃ。お母さんも大変じゃて」

「確かに落ちたら助ける方法がないわね。おいでシルバ、シロップ! こっちで日向ぼっこしましょう」

「きゅん♪」

「きゅんきゅん♪」

私が呼ぶと二匹は喜んでこちらへ駆けてきて、レジナもゆつくりと歩いてくる。腰を落ち着けてフレレと雑談をしながら日向ぼっこをしていると、おじいさんが声をかけてきた。服装を見ると船員さんのようだ。

「どうだい船旅は？ 今日のは天気がいいから波も静かだし、お嬢ちゃん達、運がよかつたよ」

「潮風がすごく気持ちよくて、のんびりできています！」

私の返事に、おじいさんはうんうんと笑顔で頷き、話を続ける。

「へブンリーアイランドには遊びに行くのかい？」

「ええ、たまたまクジが当たって遊びに行くんです」

「いいのう。むしろも休息で下りることがあるが、海も砂浜もとてもきれいじゃ。美人なお嬢ちゃん達にピッタリじゃ」

「えへへ、そうですか？」

フレレが照れていると、おじいさんはふと真顔になって言う。

「あの島は確かにリゾト地じゃが、まだ未開の部分が多くてな。開発が済んだ場所は問題ないが、それ以外の場所には近づかんことじゃ。ギルドで道を切り開く作業や、魔物退治。はたまた洞窟や森の探索などの依頼を出しておるくらいじゃからな」

「リゾト地なのにギルドってあるんですね？」

私が首を傾げて聞くと、おじいさんはポケットから煙草を取り出し、火をつけて紫煙を吐いてから喋り出す。

「開発には人手が必要じゃからのう。だからギルドを設置して冒険者をあちこちから募っておるようじゃ。遊びに来たお客には危険がないように配慮もしておる」

魔物が出るなら冒険者がいないと危険だよね。まあ今回は遊びに行くわけだし、危険な場所に近づくことはないだろう。

私がそんなことを考えていると、おじいさんの口から衝撃的な情報が飛び込んできた。「無人島だと思われていたが、どうやら人の暮らしていた形跡が見つかったらしい。人が掘った洞窟も見つかっていて、お宝があったという話もある。まあ、お嬢ちゃん達には関係ないかのう」

そう言っておじいさんは煙草をふかし私達の前から立ち去っていく。その後ろ姿を見ながらフレレが呟いた。

「お宝……わたし達も依頼を受けて洞窟探検しますか？」

「なんでワクワクしてるのよ……。今回はダンジョン攻略の慰労！ だから全力で休むわよ！ レイドさんには申し訳ないけど」

「まあまあ、レイドさんならわかってくれますよ。お宝をお土産にしますか？」  
うふふ、と笑うフレールはお宝話に興味津々なよう。私もお宝に興味はあるけど、滞在期間中に見つかるとは思えないから遊び倒す方が先決かな？

その後、もちろん船旅は順調に進み、船の中で海の幸を使った食事を堪能した後、波に揺られながら眠りについた。

そして――

「着いたー！」

「がうがう！」

「きゅーん！」

「きゅきゅん！」

〈むう、まだ眠いのじゃ……〉

「チェイシヤちゃんはわたしが抱っこしますね。うわあ、海がきれいですね」

下船した私達は海沿いを歩き、朝日を浴びながら宿に向かう。フレールの言う通り海はとても澄んでいて、ここで泳いだらさぞ気持ちよさそうだし、気温も暖かいし、絶好の海水浴日和だね。

「先に泳ぎます？ チェックインは夕方までに行けばいいみたいですけど」

「……なんとなく忘れそうな気がするから先に宿へ行くわよ。ここまで来て野宿は嫌だね、フレール」

「は、はい」

私の気迫に押されたフレールと一緒に、宿に向かう。到着した宿は、宿とは言いがたい豪華なホテルだった！ もっと民宿みたいなのを想像していただけにフレールと共に呆気にとられる。

「お、おはようございますー……」

中に入るときれいなロビーが目に入り、若干委縮してしまうが、すかさずホテルの従業員が声をかけてきた。

「おはようございます！ お早い到着ですね。あら、ワンちゃん達も一緒にですか？ ではお部屋はベットと同じ部屋ということでしょうか？ でしたら一泊銀貨六枚になります！」

お高い！ しかし今の私には魔法のチケットがある……！

「えっと、これをお願いします」

受付カウンターに案内されたので封筒からチケットを二枚、女性従業員に渡すと真剣な顔でじっとチケットを覗む。

「……あの?」

「……ふむ、エクセレティコ王国のチケットですね、確認いたしました! いやあ、偽物を作ってくる輩もいますので、きちんと鑑定をしないとイケないんですよ。それではお部屋へご案内いたしますね。あ、ワンちゃんもそのまま入ってきていいですよ。ペット連れのお客様用のお部屋がありますので」

「ありがとうございます。よかったですわね、みんな」

「がうがう」

「きゅん!」

「きゅきゅん」

〈コ、コンコン……〉

抱っこされたままのチェイシャが妙な声を上げていたけど、従業員さんは気に留めなかったようだ。

「ごゆっくりどうぞー。夕飯は十九時で、お部屋にお持ちします。その時間までには部屋に戻っていただけると非常に助かります」

「はい! 楽しみですねえ……」

フレールがうふと目を細めて夕飯に思いを馳せていると、従業員さんは微笑みなが

ら出ていった。ご飯も楽しみだけど、ここはやっぱり……

「それじゃ、早速海に行きましょう!」

「そうですね!」

〈わらわは行かんぞ。まったく強欲の魔神が海ではしゃぐなどあり得んわい〉

私達が水着に着替えていると、チェイシャが悪態をついて丸くなって寝ていた。魔神は関係ないと思うんだけど……

それはともかく遊ぶぞと、水着に着替えて海へと向かった。

そして――

「うひゃあ、気持ちいいー!」

「それ!」

「あ、やったわね、フレール! えい!」

「きゃあ! あはは! 楽しいですね!」

「最近ずっと戦ってばかりだったから、たまにはね。シロップに感謝だわ!」

「きゅん……きゅん……」

当のシロップは浅瀬でばちゃばちゃと犬かきをして泳いでいる。シルバはヤドカリをおもちゃにして砂浜で遊び、レジナは大人しく寝そべって子供達の様子を見ていた。

そんな中――

〈によほほほ！ 冷たいわい！ これは気持ちええのう！ ほれシロップ、追い抜くぞ〉

「……！ きゅんきゅん！」

あれだけ嫌そうにしていたチェイシヤが海で一番はしゃぎまくっている。

「結局遊ぶんじゃない。意地を張らなきゃいいのに」

〈なんじゃー？ 聞こえんぞー、ふおつふお……がぼごぼ!?〉

「ふっ、成敗」

「ああ、チェイシヤちゃんか!？」

とまあ、初めての海水浴だったけど楽しく遊んでいた。このヘブンリーアイランドは南の島だけあって気温が高く、海に入るくらいがちょうどいい。

「ふう、はしゃぎすぎちゃいましたね！」

「休憩する？ シロップの面倒ありがと、ね……」

シロップと泳いで遊んでいたフレレレが、浜辺へ上がってきた。彼女に声をかけるが、どうしてもある一点に目がいつてしまう。

「フレレレって着痩せするタイプよね……」

「？ なんですか？」

ロープと同じく白色のワンピースタイプの水着がよく似合ってる。

でも、どことは言わないけどとても大きいので、フレレレにはピキニの方がもっと似合いそう。しかし、少し前にデッドリーベアにやられた背中の傷を隠すため、しっかりと肌を隠すタイプの水着を買っていた。

曰く『遊びに来ている人が自分の傷を見て嫌な思いをしなくていいように』とのこと。そんなことを考えていると、フレレレが私の水着を見て呟く。

「そういうえばルーナの水着、可愛いですね。わたしもそういうのにすればよかったです」  
「ありがとうございます。でも実はちょっと子供っぽいかなって思ってるんですけどね」

私はフレレレの逆で胸に傷があるため、胸元を隠す水着にした。寝間着のような水着なのですごく可愛いんだけど、デザインがやや子供っぽいかな。

「まあ、誰かに見せるわけでもないからいいんだけどさ」

「レイドさんが来れば見てもらえたんですけどね」

「え!? フレレレ、もしかしてレイドさんのこと……」

ダンジョンで一緒だったし、頼りになるからそれも有り得る……い、いや、別にフレレレが誰と付き合ってもいいじゃない……アントンの件で嫌な目にあつたし、それでも好きな人ができるなら祝福してあげるべき……と勝手に妄想を膨らませていると、フレレレ

レが首を傾げて私に言ってきた。

「え？ 男性の意見も聞きたくないですか？」

「あ、ああ、そういう意味ね！」

「？」

私のピンク色をした妄想など知る由もなく、フレレレはにこつと笑ったまま私を見ていた。ちよつと恥ずかしくなつたので、話題を変えることにする。

「それにしてものおんびりできていいわね。人は多いけど、浜辺が広いからレジナ達がいなくても気にしないで使えるし」

「シロップのおかげですからね。よしよし♪」

「きゅきゅん♪」

フレレレが背中を撫でると、シロップは嬉しそうに濡れた体をぶるぶる振って水を飛ばす。

「もうひと泳ぎする？」

「そうですね、わたし泳ぐの苦手なので、もっと練習したいです！」

「きゅんきゅん！」

「ふふ、シロップが教えてくれるみたいよ？ ちなみに私は故郷にいる時、川でよく遊

んでいたから教えられるかも」

「あ、ぜひ！ ……おや？ あれはなんででしょう？」

早速海へ入ろうと思つたその時、フレレレが人だかりを発見する。目を凝らしてよくみると、三人の男性が大勢の女性に囲まれているようだった。さらに目を細めて観察すると――

「三人ともイケメンね。それを狙つて女の子達が取り合いをしている、そんなところかしら」

「よ、よく見えますね……。そういえば『恋人同士で幸せな休みを楽しむ』みたいな触れ込みがありましたし、デートするにはいいかもしれないですね。わたしにはしばらく無理そうですけど」

アントンの件がまだ尾を引いているらしく、困つたように笑うので、私も肩を竦めて口をとがらせる。

「ま、そこはお互い様よね。私もお父さんを養わないといけないし」

「そういえばそうでしたね。わたし達には彼氏なんて夢のまた夢ですわねえ」

私とフレレレは遠巻きに人だかりを見ていたけど、すぐに飽きて海に入る。チェイシャは寝そべってレジナと一緒に波打ち際に休憩するようだった。そんな二匹を尻目に



フレレレの手を取って泳ぎの練習を始める。

「そうそう、その調子よ、フレレレ！ あ、シルバ、気を付けなさいよ？」

「きゅん!？」

おっと遅かったみたい。浜辺でカニをおもちゃにしていたシルバがカニの反撃にあい、鼻を挟まれてしまったのだ。頭をぶんぶん振ってカニを振り払おうとするがカニは離れない。

「きゅきゅん！」

するとそれを見ていたシロップがカニを叩いて落とすしシルバの鼻を舐めていた。

「ふふ、シロップはお兄ちゃん大好きですね」

フレレレが微笑むとチェイシャが伸びをしながら口を開く。

〈くあ……流石さすがに疲れたわい……む！ おい、ルーナ、魔物じゃー！〉

「え!？」

浜辺でチェイシャが叫び、その視線を追うと、

「きゃああああー！」

どこから現れたのか、大きな蛇のような魔物が先ほどの集団へ襲い掛かろうとしていた。

「フレレレ！」

「はい！」

私はレジナの首にかけていたマジックバッグからフレレレのメイスと自分の剣を取り出し、補助魔法を使う。

「《フェンリルアクセラレート》《パワフル・オブ・ベヒモス》！」

スピードとパワーを上げて一気に近づき、蛇の背中へ剣を振り下ろす。

「シヤアアア!？」

一瞬、跳ね返されるような手ごたえを感じたけど、補助魔法のおかげで傷を負わせることができた。

「逃げて！」

「わ、わかったー！」

私が叫ぶと男女の集団は蜘蛛の子を散らすように逃げていった。蛇の注意も引いたから、標的は私になるはず！

「ルーナ！」

「シヤアアア！」

「はっ！」

私の足に噛みつこうと蛇が身を躍らせて襲ってくる。それをかわしながら頭を切り裂くと、血がしたたり落ちた。少し浅かったかと間合いを離した瞬間、

「《マジックアロー》！」

「シヤアアアア!？」

フレールの放った魔法の矢が、蛇型の魔物にブスブスと刺さり、魔物は苦しみながらのたうち回る。

「ちよつと動きが鈍った、今ね！」

「わたし、頭を狙います！ やあ！」

私の剣が大蛇の胴体を切り裂いて真つぶたつにし、フレールのメイスが頭へ直撃！ 蛇は少し痙攣けいれんした後、ピクリとも動かなくなった。デッドリーベアやダンジョンで経験を積んでレベルが上がったせいか、ふたりでもしつかり倒せた。

「ふう………」

「マジックバッグに武器を入れておいてよかったですね。皆さん、無事みたいです」

「まったくだわ。それにしてもこんなが出るの？ おちおち海にも入れない気がするんだけど……おや？」

突然のアクシデントに慥然としていると、遠くから軽装備をした人達が走ってきた。

「魔物が出たと聞いて急いで来たが、倒されていたか。君達が？」

褐色肌の男性が武器を持っていた私達を見て尋ねてきた。

「あ、はい。皆さんが危なかったので私達が倒しました」

私がそう言うと、彼は頭を下げた一度口を開く。

「すまない、ご協力感謝する。我々はアクアステップの騎士団。浜辺の警備を担っているのだが、今回は間が悪い時に現れたようだ」

「警備範囲が広いから大変ですね」

すると騎士団の人が私の顔を見た後、フツと笑いながら言う。

「そう言われると、ありがたい。いつもはもつと早く来いと罵倒されることが多いからな」「監視する人数が足りないのでは……？」

フレールが尋ねる。

「それは否めない。でも海に魔法障壁を作ろうとか、ギルドで冒険者を警備として雇おうといった案が出ているから、今後はもつと安全に遊べるはずだ。さて、それはともかくこいつを倒した報酬を用意しておくから、ギルドで受け取ってくれ。名前は？」

おや、これは思わぬ収入。

「えっと、ルーナと言います」